

Weekly Michael's News

<今週の聖句>

2018年10月15日発行 No.83

『イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは更に言葉を続けられた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。』

(マルコによる福音書 第10章23～25節)

<50周年のつながりと感謝を覚えつつ…。 創立記念お月見オルガンコンサートを開催!! >

先週土曜日は、お休みにもかかわらずチャペルはほぼ満員となりました!! なぜって…? 神戸国際大学創立50周年を記念するオルガンコンサートが開催されたからです!! 今回のコンサートは、季節にちなんで「お月見コンサート」と題されていますが、もう一つの副題として「祈りのかたち」という言葉がつけられました。これに関して、本学オルガニストの伊藤純子さんから以下のようなコメントと解説をいただきました。

「お蔭様で本学は、創立50周年を迎える事ができました。この記念の節目に当たりまして、オルガンコンサートのテーマとして、「祈り」という言葉を添えさせて頂きました。「祈り」とは、今まで本学を支えて下さった方々、そしてこのパイプオルガン「ルナ」を支えて下さった方々への、感謝の祈りです。その中には、既にこの世を去られていらっしゃる方もおられますが、もちろん本日この場にお座り頂いているお一人お一人も、ルナや神戸国際大学を支えて下さっている方々です。ここで捧げられる感謝の想いが皆様に伝わる事で、それぞれの中で大切な方々の顔が思い出され、より多くの感謝に繋がるような、そんな一時となるよう願います。」

当日は演奏者として、芦屋カトリック教会のオルガニスト 朴 秀美さんをお迎えして、またこのオルガンの生みの親であるアメリカ・フィスク社の会長スティーブン・ディークさんも出席してくださいました!!



会場はほぼ満員の大盛況!!



学生も受付ボランティアで大活躍!!



フィスク社のスティーブンさんと一緒に

爽やかな秋晴れの中、多くの出席者の皆様と共に、改めて神戸国際大学の50年の歩みと繋がりを想起する一時が与えられた事に感謝します。これからもその歩みを止めることなく、更に世界へと翼を広げていきたい…そんな神戸国際大学の願いの実現には、関係する一人ひとりの繋がりをより深めていく事が求められます。先月の記念式典、このコンサートに続き、来月はホームカミングデーも企画されていますが、それらを通して豊かな「秋の実り」が与えられる事をお祈りしています。

＜先週のメッセージ＞

※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています

10月8日（月）テーマ：「相應しい助け手」

野間 光顕（チャプレン）

先週、TV ではノーベル賞に関するニュースが注目を集めた。その中で平和賞に輝いたのがテロ組織による性暴力の残虐さを世界に伝えたイラク少数民族のアイ・ムドさんとアフリカの紛争の中で性暴力被害者の治療に尽力する産婦人科医デニ・ムウエグさんだった。ムドさんによる国連での涙の訴えは、戦争の狂気が生み出した残虐非道なものだった。しかしそれを語るムドさんによって悲しむ一人ひとりに希望の光が与えられている。一方ムウエグさんは「厳しい状況の中でも確実に前進している」と希望を語る。今日の聖句は、創世記の人間創造だ。ここでは「助け手」が、同じ目線で対等に関係を繋ぐ「パートナー」と言われている。今一度、身の周りの繋がりを大切にしたい。

10月9日（火）テーマ：「夏の学び」

川畑 勇人（経済学部3年）



私は「流通論」の授業で物の流通に関心を持った事からこの夏、インターシップとして青果会社で職業体験を行った。大学のキャリアセンターから紹介してもらい5日間の実習を行った。私が実際に担当した仕事はライ作業が主であったが、簡単そうに見える作業でも細かい注意点があり、慣れない私は失敗してしまった。しかし職場の方が優しく丁寧に指導を下さり何とか乗り切れた。今回の学びで大きかったのが丁寧なコミュニケーションだ。報告は当然、出・退勤時の挨拶も基本だ。この経験を次に生かしたい。

10月10日（水）テーマ：「寄り道をしよう 急がば回れ」 中越 竜馬（リハビリテーション学部）

今であれば東京ー大阪は2時間半程で行けるが、江戸時代は2週間近くかかった。何事も早く処理する事が求められる現代社会に私たちは生きているが、人生においてその「早さ」はそれほど価値のあるものなのか？ 幕末の偉人である西郷隆盛や坂本龍馬の歩みを見ると、島流しや放浪など何の意味もないような時を経験している。しかし、その空白の時に自分の置かれた状況や進むべき道を分析したからこそ、必要な時にチャンスを生かして必要な行動ができたのではないかと。皆さんも与えられた時間に、ゆっくり回り道をして見聞を広めて欲しい。

10月11日（木）テーマ：「地球温暖化の未来」

白砂 伸夫（経済学部）

先日の新聞で衝撃的なニュースを目にした。「地球温暖化がこのまま進めば約10年後の2030年には気温が1.5度上昇、それに伴い海水面が77cm上昇する」という報告をIPCC（国連気候変動に関する政府間パネル）が提言したというのだ。これによって生態系では昆虫の6%、脊椎動物の4%、植物の8%の種が生息域の半分以上を失う、更に2度上昇だとその2倍～3倍に影響が出るという。このような世界に未来はあるのだろうか？ このニュースは現代に生きる私たちに、生活様式に対する真剣な見直しを厳しく迫っているように思う。

10月12日（金）テーマ：「ニーバーの『光の子と闇の子』」

居神 浩（副学長）

今回は本を紹介したい。アメリカの神学者ライナルド・ニーバーの「光の子と闇の子」だ。優れた政治学者でもあったニーバーは、第二次大戦末期の1944年に、アメリカ社会が内包する脆弱性を指摘しながらも、その原理の正当性を擁護するためにこの本を出版した。ニーバーは驚くべき言葉を残している。「世界を二分する思想、すなわち日独などの全体主義と英米の民主主義はそれぞれ闇の子と光の子と表す事ができる。一見、シニスマ（冷笑主義）やファシズムに対抗して民主主義は大きな力を持つように思われるが、その性善説的な人間観が大きな弱点であり、悪の力を過小評価している…」聖書にも「蛇のような賢さと鳩のような柔和さ」という言葉が出てくるが、どの時代においても、このような物事を見抜く目が求められるように思う。（文責：野間 光顕）